
最後のハンター

湯たぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のハンター

【Nコード】

N9253R

【作者名】

湯たぼん

【あらすじ】

教官として、「次世代のハンター」を育てる立場にありながら、自身は「最後のハンター」という称号を持つ老ハンター。その矛盾する称号を得るきっかけとなった旅について、彼は重い口を開き語り始めた・・・

序章

「・・・私の称号？」

籐の椅子に優雅に腰掛け、パイプを手に持ったその初老の男性は、ちらと疑いの目を見せながら聞き返してきた。

先生、というイメージにふさわしい堅いタイトルの本がずらりと並ぶ棚をバツクに、

しかしその老人は奇妙なほどに筋肉質の、頑健な身体を椅子に押し付けていた。

筋肉質といっても分厚くはなく、鋼が鍛え上げられて細く鋭くなるように

無駄のない極上の筋肉だけを搭載した感のある見事な身体だ。

本棚のまわりもよく見れば、壁に幾振りもの剣や盾、重厚な大剣、弓などが掲げてある。

飾りではない。どの武器の柄も、ちょうど手の高さにある。

明らかに、選びやすいように、手に取りやすいように工夫された配置の仕方だ。

だが片腕が無い。片眼にも大きな傷があり、見えていないのは明らかだ。

覇竜に腕を吹き飛ばされ、迅竜に眼を潰されてもハンターである事をやめなかった、伝説のハンター！

それこそがこの老人であることを、この部屋の訪問者は知っていた。

・・・ちつ、やはり話しながらない項目だったか。

老人の反応に内心舌打ちをしながらも、向かいに座った記者は身を乗り出し、話を続けた。

「そう。あなたは教官として、後進の育成に取り組んでいる。

あなたの下から優秀なハンター、言うなれば“次世代のハンター”が幾人も出ているというのに・・・」

記者は一度言葉を切り、話し相手の顔色を窺いながら慎重に次の言葉をつないだ。

「・・・あなたは自身は“最後のモンスターハンター”、と呼ばれている。

その矛盾には何か深い理由と、物語があつたのではないかと思ひ・・・伺ったわけです」

しばし、沈黙が流れた。

老人は壁の大剣をじっと見つめていた。

60を過ぎても飛竜を狩り続けたこの伝説のハンターも、手を顔の前で組み背を丸めてうつむき悩む姿は年相応に見えた。

眉間には普段見せないしわが深く刻まれている。

悩ませてしまったか。記者が罪悪感を抱いてしまうほどの苦悩の表情を浮かべ、老人は天井をにらんでいた。

「・・・バルト先生？」

バルト・リース。伝説とともに語られるその名。

押しつぶされるような重い沈黙に危機感を感じたのだろうか、記者は懸命にその名を喉から搾り出した。

老ハンターは厳しい顔を正面に向けるとテーブルにひじをついた。そのまま記者のほうへ詰め寄るように近づくと、耳打ちするような声でささやいた。

「記者さん、これは見所のある生徒にしかしてこなかった話だ。

その意味も考えて記事にしてくれるとありがたい」

記者がゆっくりと、そして力強く頷く。

老人は満足したように椅子に深く腰掛けると、天井を見上げながら

パイプ片手に慎重に話し始めた。

「あれは、私が片腕を失った直後だったな・・・」

その1

死はもはや目前であった。

まるで確定されたスケジュールのように、自分の数分後の終末を感じ、

しかし男は楽しそうに舌なめずりしていた。

後ろに逆立てた銀色の、髪の毛のように見えるのは銀火竜の尖鱗を折り重ねたヘルム。

身体の各所にも、一見するとハデに装飾された飾り服のように軽装だが、

どの部分も銀火竜の鱗、白眠鳥の牙嘴、崩竜の宝玉、貴重な硬鉱石など惜しみなく使われた極上の鎧だった。

全身銀の戦士、彼は名をバルトといった。

首には最高ランクのハンターの証、「G」のメダルがぶら下がっており、

腰にさしているのはギルドナイトをあらわす短刀。

銀のヘルムにもよく見れば、伝説の祖龍ミラアンセスの首をかたどった前立てがついている。

つまり、どこからどう見ても一流のモンスターハンターである事が分かる、バルト＝リールは、そんな男であった。

「お、来たな・・・」

そんな彼を死に導こうとしている相手が、今樹海の空を覆った木々の間からゆつくりと翼を上下させながら降りてきた。

禍々しい濃緑色の鱗が身体を覆い、さらに禍々しい赤い大棘が身体の所々から姿を見せている。

手と一体化した翼を羽ばたかせ、二足でコケだらけの地面に着地した姿は、

バルトの長いハンター生活でも初めて見るモンスターだった。

ハンターズギルドでもつい最近になって存在を認識しはじめた新種のモンスター、エスピナス。

うわさでしか聞いたことの無かった幻の竜が、鼻先のひときわ大きな赤棘をめぐらして、あたりを見回している。

「へっ……探しているな。お前の獲物はここにいるぜえ……」
バルトはつぶやきながら背中吊るした大太刀の柄を右手で握り締め、ゆつくりと音を立てずに立ち上がった。
先ほどの戦闘で、この大業物は折れかねないほどのダメージを受けていた。

エスピナスの甲殻があまりに硬く、バルトの斬撃をことごとくはじきかえしたのだ。

天上天下天地無双剣という大層な銘をもつこの大太刀を握った、剣聖と謳われたバルトの攻撃を弾くとは並大抵ではない。

むしろ不可能ともいえた。

それなのに斬撃は弾かれた。原因は二つある。

一つは、このエスピナスの甲殻が常軌を逸して硬いということ。

もう一つは、バルトの身体にあった。

スラリ

バルトは抜刀すると同時に、見事に足音を消しながらエスピナスの背後へと近づいた。
地面のコケは足音を消すのに役に立ち、樹海の木々はバルトの派手な装備をも隠すほどに生い茂っていた。

「ヒュッ！」

短く、力強い息吹と共にバルトの愛刀がエスピナスの赤棘だらけの尾を大上段から襲う。

ゴッ！

が、結果むなしく先刻の戦闘と同じく銘刀は再び天空へ向けて跳ね上げられた。

自慢の尻尾に攻撃を加えられたエスピナスもようやく振り返り、バルトと大太刀とを眼で確認した。
さほど気落ちした様子もなく攻撃的な眼を返すバルトに対し、エスピナスは……

「……つく！きッさまア！」

エスピナスの意図を肌で感じ、バルトは目つきをさらに凶悪に変え、怒号をあげた。

「また手抜きかア！！」

エスピナスは、無視したのだった。

首を元の向きに戻し、何事もなかったかのように歩き始めた。眼の色も攻撃色をたたえてはいない。

この場所へ下り立つ前、別の広場でバルトと遭遇した時も、この棘竜は一度も攻撃しなかった。

のこぎりのように赤棘が揃った翼も振るわず、恐らく毒が染み出ているであろう角で突いてくる事もなかった。

凶悪な牙がびっしりと生えた口も、開けられる事無く広場から飛び立った。

はじめなどは、何度も刀を振り下ろされながらも無反応で寝ていたほどだ。

早くもこのちっぽけなハンターに対する興味をなくしたかのように顔をそむけ、

尾をぴんと地面に水平に伸ばし悠々と歩を進めるエスピナスに対して、

バルトは尾に、足に胴に弾かれる大太刀を何度も叩きつけ（もはや斬りつけるとは言えなかった）、叫び続けた。

「来いよ！その角をこっちへ向けるよ！」

前に回ってエスピナスの顔にも太刀を振り上げ、声を張り上げた。

「ふざけるなよ！この俺相手に手抜きなんて誰であろうと許さん！」「
どれだけ攻撃しても、何を言ってもエスピナスは反応せず、もはや

バルトを見ようとせせず一方向へ向かって歩いていった。

「俺を馬鹿にしているのか！俺の・・・俺のこの隻腕を！！！！」

眼に涙まで溜め、声を枯らしてバルトが叫ぶ。

同時にエスピナスが声に反応した。まるで彼の言葉を理解したかのようにバルトの片腕に巨大な眼を向けた。

バルトの言うとおり、彼自身の身体に腕は2本無かった。左腕の肘から先が無い。

覇竜・アカムトルムとの戦闘で失ったのだった。

相打ちで覇竜が倒れた後であったので治療が早く、命は拾ったのだが両手で武器や盾を持つ事が出来なくなったハンターなど、もはやハンターとは呼べなかった。

ハンターズギルドの町に運びこまれ、診察所のベッドで眼が覚めた時、バルトはその事を痛烈に感じたのだった。

身体が動くようになると、医者が止めるのも聞かず、ギルドの制止も意に介さずふらりと気球に乗り

この飛竜が跋扈する樹海に降り立った。

自分をハンターのまま終わらせてくれる相手が欲しかった。

自分と戦い、殺してくれる強力なモンスターを必要としていた。

火山の炎王竜でも良かった。雪山の金獅子でも良かった。

考えながら気球を繰るうち、自然と樹海へと向かっていた。

(死んだ後、暑かったり寒かったりしたら嫌だな)

奇妙な理屈だが、自分の死体の事を考えての樹海だった。
それが数日前の事だ。

数日間さまよい、幸運なことに新種のモンスターを発見したというのに……

「それがこんなヤツとは。反撃してこないのは同情のつもりか？ふざけるなこの野郎！」

背中に乗り、赤棘をひつつかみ
飽きもせずに太刀で殴りつけながらバルト。

自分の身長ほどの長さもある大太刀を片手で軽々と操るのは尋常でないが、

さらに尋常でない硬さを誇るエスピナスの装甲を貫くほどではなかった。

「……」

その間、エスピナスは歩きながら、じっとバルトの方を見ていた。
哀れむわけでもなく、先ほどのように無視するわけでもなく。

バルトを理解しようとするかのように、ぐ……っと首を伸ばし振り返り、

自分の背中にのしかかり夢中で太刀を振り回すハンターにその巨大な眼球を向けていた。

いつしか周りにうつそうと茂っていた木々は後方に消え、バルトを背に乗せたエスピナスは、小さな湖に面した広場に出た。広場の中央で一旦足を止めると、エスピナスは前方へ首を戻し、ゆっくり息をついた。

この奇妙な人間の心底を理解することをあきらめたのか、左右に頭を振り、そして・・・

『やれやれ・・・仕方ないな』

「!!!？」

人間の言葉でそうつぶやくと、飛竜に話しかけられて驚くバルトを背中に乗せたまま

ウオオオオオオオオオオオオ!!!

すさまじい勢いで大きく吼えた。

同時に発生した衝撃波で飛ばされるバルト。

背中から地面に叩きつけられても、しかし彼の口から漏れてきたのは激痛に耐えかねた悲鳴でも

竜が人語を話したことへの驚愕の声でもなく

「そう、こなくっちゃ・・・!!」

歓喜であつた。

飛ばされた勢いそのままにすばやく立ち上がり、刃の丸くなった太刀を肩にかつくと、急に冷静になったバルトは改めて相手を観察しだした。

「全身・・・やや腹あたりがやわらかかったが凄まじく硬質な甲殻だな。人の言葉をしゃべる竜なんて聞いたこともないが・・・」

「それだけ貴重な竜ということか。最後にはふさわしい相手じゃないか」

ピクリ。”最後”という言葉にエスピナスが再び反応したようにも見えたが、人語を操る竜は今度は黙ったまま右足で数度地面を掻き、広場を突っ切つてバルトめがけて突進してきた。

その2

「ちい・・・っ！」

硬い甲殻に何度も叩きつけられた太刀では応戦できない。

バルトは迫る大顎に太刀をひっかけ、辛うじて牙と凶悪な棘のついた翼の下を潜り抜けた。

エスピナスは特に気落ちする様子も無く、急ブレーキで止まるや否や振り向きざまに、大きく両翼を振り回し、鼻の角を突き入れてきた。

鋭い刺がずらりと並んだ翼はまるつきり太刀だ。

左にフェイントをかけて反対側へ転がる事で両翼を、起き上がりのところに迫ってきた角は顔を蹴って後方に跳ぶことのできるうじてかわし、バルトはいったん距離をとった。

「むちゃくちゃな動きしやがるな・・・さすがエスピナス！」

竜に話しかけられた事などすっかり忘れて、バルトは不敵な笑みを浮かべて再び太刀を構えた。

刃はぼろぼろだが、エスピナスの動きをある程度見切るまでは研いでいる暇などない。

どんな攻撃がきても対応できるように、身体を柔らかくし敵を油断なく観察していると

エスピナスは先ほどよりも力強く、闘牛のように足で数度地面を搔き

「！？嘘だろ、おいっ！！！」

あり得ない速度で突進してきた。

悲鳴をあげながら、回避は無理と悟ったバルトはまたしても刀で角をさばくが

ほぼ同時に迫ってきていたエスピナスの脚に吹き飛ばされた。

「ぐ……っ！」

強打した左肩の痛みにも耐えつつも、吹き飛ばされた方向へ逆らわず身体を投げて距離をとった。

1度地面を転がったただけですぐに身を起こし、低い姿勢で辺りを確認する。このあたりの動作は、さすがに一流のハンターである。

が、向こう側へ走り去ったはずのエスピナスのほうを見ると……

「！？嘘だろ、おいつー！」

さきほどと全く同じ悲鳴をあげるバルト。

すさまじい勢いで突進していたはずのエスピナスは、既にこちらの方を向いていた。

現実感を感じないほどのドリフトで、地面をえぐりながら無理矢理方向転換していたのだ。

そのまま、さきほどと同じ速度で突進してくる。

「うおおおおお?!」

完全に逃げ遅れて、混乱したような気合を入れながらバルトも太刀を振り上げる。

ザグ……ッ

角がこちらに届く一瞬前、バルトの太刀がエスピナスの顔面をとらえた。

しかもぼろぼろだった刃が通っている・・・！

『むう・・・！』

エスピナスがまた人のような唸り声をあげるが、気にしている場合ではない。

迫りくる巨体を避けようと、顔面に刺さった太刀を支点にバルトは上空へ高く己の身体を跳ねあげた。

10メートル近い高さまで達したのではないだろうか。

本来見えるはずのない樹海の地平線を横目に、やけにゆっくりとした感覚でバルトは落下していった。

しっかりと受け身をとって再び敵を確認すると、今度は方向転換せず、エスピナスは惰性で広場の反対側まで突進していた。

ある程度安全と分かると、バルトは即座に右手にあった林へと身を隠した。

「距離のある今のうち・・・だ」

もう一度エスピナスを遠目に確認すると、バルトは懐から小さな石を取り出した。

太刀を抜きしゃがみこんだ姿勢で、石を刀身にこすりつける。

砥石だった。ハンターになるのに必須スキルと言える武器研ぎは、一人前になるために5秒は切らないといけなと言われている。

あまり研ぎが得意ではないバルトでも、エスピナスの堅い装甲でぼろぼろになった刀身を元の鋭さに戻すのに何秒もかからないだろう。しかし

ドオン！！

突然、太刀を研いでいたバルトのすぐそばで爆発が起きた。

「ち・・・まさか」

木陰からちよっぴり顔を覗かせると

エスピナスが力を溜めるように、顎を高く上げているのが見えた。

「ちい、プレスも吐くのか！」

ドオン！！

再び放たれた火球を転がってかわす。なんだか緑色をしていた気がするが・・・

「なんつて身体に悪そうなプレス吐きやがるんだ。体調管理には気を付けるよ！」

ぼやきながら、磨き終わった太刀を手にバルトは林から駆け出した。

ドオツ！ドゴン！！

たくみにプレスをよけながら距離を詰めると、振り回された翼を潜り抜け

ガラ空き腹部へ向けて切っ先を突き入れた。

「ハッ！やっぱり刺さるじゃねえか！」

エスピナスが咆哮するまで、何度叩きつけても斬れる事なかった。エスピナスの身体に、軽く繰り出しただけの突きが刺さっていた。良く見ると、異常なまでに堅かった緑色の鱗が若干外側に開いている。

戦闘に移行すると、血流を増やすために甲殻を開く飛竜は他にもいた。エスピナスもその一種だろうか。

「さあ！こつからはお仕置きタイムだぜ」

無視された事を未だ根に持っているのか、器用に片手で太刀を一回転させると、怒涛の連撃に出た。

姿勢を低くし、背の高い二足歩行のエスピナスの視界から隠れるようにして

執拗に腹部を切り裂いていく。

「どうだ！？見向きもしなかった相手に見えないところから滅多切りにされる気分は！」

胴を薙ぎながら後ろへ回り、尾を切り上げては脚を斬り払いながら反対側へ滑り込む。

一瞬たりとも同じ場所に身を置かない戦い方で見事にエスピナスを翻弄し、バルトは得意げな声をあげた。

「・・・ああ、あまり良い気分ではないな・・・」

頭上から思いがけず返ってきた声に、バルトが驚いて上を見上げるとエスピナスが先ほどと同じように、力を溜めるように顎を高く上げていた。

『だが、油断大敵だ』

そのまま、高く上げた顎を真下へ降り下ろし巨大な火球を吐きだした。
同時に自身は大きく羽ばたいて後ろへ跳び、自分のブレスに巻き込まれないように退避しようとしている。

「が・・・っ!？」

どう考えても直撃なタイミングだったが、ハンターとしての本能で即座に回避行動をとっていたバルトは
間一髪でエスピナスの足元から離れていた。

「ぐ・・・!全部はよけきれなかったか」

残った左手に緑の液体がかかっていた。手の先まで腕があつたのならばブレスの直撃で吹き飛ばされていたかもしれない。
もともと無かつたから良かった・・・とは言えないが。

何にしるエスピナスには距離を置かれてしまった。
即座に体勢をととのえて前方を見やると、エスピナスはふたたび地面を足で掻き、突進の構えを見せていた。

「バックジャンプブレスには驚いたが・・・どうやら攻撃パターンはその程度のような」

さきほどは避けきれなかつた、エスピナスの常識外れのスピードでの突進を目の前にしても
今度は余裕の表情を見せているバルト。

「見切つた。もう何も当たらないぜ?」

目の前まで来た棘竜の突進を難なくかわし、振り向きざまに太刀を振り上げたその時

一瞬、視界が歪んだ。

同時にすぐ横を通り過ぎるエスピナスの口から、勝ち誇ったような声が聞こえた。

「聞こえなかったのか？油断大敵だ。」

カラッ

突然、標的に達する前にバルトの太刀は後ろに落ちた。同時にバルト自身も片膝ついて動きを止める。

「マヒ毒・・・付きのブレスだと・・・」

よく見ると体液を浴びた皮膚がひどくただれてきている。

全身もしびれてきて動けない。二重の毒ブレスだったのだ。

その3

『勝負あり、のようだな』

エスピナスがゆっくりと近づいてきた。

速効性のマヒ毒ではそう長い間動けない状態は続かないだろうが、これほど近づかれた状態では

動けるようになったところで生死は完全に相手に掴まれたようなものだ。

「ち……まあここまでやれただけで良いさ。

最後の狩りとしては満足だ。やれ」

『ふむ……また”最後”と言ったな。』

またも理解できないという風に、首を振りながらエスピナス。

「……ああ、こんな身体じゃあハンターはもうやれないからな」

ひじから先が無い左腕を指し示すバルト。全身の痺れは取れてきたが、戦意はもはや失っていた。

太刀を拾わずにゆっくりと立ち上がると、エスピナスの方を向いた。

『だから死ぬ、か？』

目の前まで顔を近づけて、静かな声音で語りかけるエスピナスに対し

「俺はハンターだ！ハンターでなくなるわけにはいかない！」

バルトは激昂していた。今さら腕を無くした事を後悔するかのよう
に、苦悩の表情で全身をわなつかせている。

だが、そんなバルトにエスピナスはなおも静かに語りかけ続けた。

『違うな。お前はハンターではなく、人間だ』

『人間ならばハンターでなくとも生きていけるはずだ。何故その道を探さない』

だが、バルトは急にうなだれると、再び座り込み力なくかぶりを振った。

「人間かどうかなんてどうでもいい。ハンターでないのなら俺に生きていく意味はない……」

『では、死ぬことに意味はあるのか？』

ふ……つと、バルトが顔を上げた。一瞬目に迷いの色が走るが「……意味なんてねえよ。生きるのが嫌になったら死ぬだけだろ。お前なら、俺をハンターのまま死なせてくれると思ったのによ」

ふむ……

エスピナスがゆっくりと、納得するように息を吐いた。鼻息で目の前のバルトの髪がくしゃくしゃになる。

バルトが髪を直しているうちに、エスピナスは背を向けて歩き出した。

『生きる意味が分からなくなったのなら

私について来るが良い、哀れなハンターよ』

肩越しに投げかけられた言葉に、バルトが戸惑っていると再び立ち止まり、少しだけ振り向いてエスピナスは続けた。

『死の意味が分かったその時に、殺してやろう』

「・・・」

エスピナスの言葉の意味が分かったわけではない。

ただ、その言葉の奥に秘められた不思議な響きにつれられて

バルトは太刀を拾い、立ち上がった。

その3 (後書き)

最後のハンター、一章終わり。

エスピナスに連れられて命の旅を始めるバルト。
どんな”最後”が彼を待っているのでしょうか。

その1

びよこん。目の前に咲いていた花が、上へ跳ねるように動いた。

ははぁん・・・これは

バルトは、一人納得するように小さく頷くと、左手の盾を動いた花の上にかざした。

左手の、盾の先にあるはずの腕がない。

常に危険なモンスターと戦うハンターである彼は、戦闘で腕を失ったのだった。

とはいえ、肘から上に残った左手に堅強な盾をくくりつけ、右手には鋼龍の角から削り出した極上の剣を提げている。

雪獅子の希少毛を贅沢に用いた服飾鎧を身にまとい、片腕でも十二分の戦闘力を持っている事がうかがえる。

そんなバルトが薬草探しの最中に見つけたのは、チャチャブーだった。

頭にキノコや花を生やし地中に隠れる事で獲物を待ち襲いかかる、奇面族。

見た目は小さな子供程度の大きさで、奇妙なかぼちゃのような面をかぶっているひょうきん者だが

ある程度の知能があり、手に持ったナタの一撃は中型程度のモンスターならば倒してしまう程の威力がある。

そんなのが地中に隠れているのだから、旅人にはたまったものではない。

が、ハンターであるバルトにとっては見間違えるはずはなかった。

「よ……つと」

バルトが花の上で盾を振ると

キキイ！

予想通り、甲高い奇声をあげてチャチャブーが飛び出してきた。

「……!？」

ただし、バルトの背後からである。

「イヤ〜、こんな所に狩りに来るハンターは初めて見たヨ」
完全にバルトの不意をついたチャチャブーは、さらに驚くべき事に
人語を話し始めた。

チャチャブーの指摘通り、バルトが今いる森はハンターズギルド指
定の猟場ではなかった。

なかば化石化した白い巨大な樹が立ち並び、わずかな光しか刺さな
い地面はコケばかり。

木材も鉱物資源も、むろんモンスターもこんな所には棲まないの
でハンターには用のない土地だった。

しかし、そんな事をたかが雑魚モンスターが……しかも言葉まで

『なんだ、こんな所に居たのか』

バルトが混乱していると、背後からまたも人間ではない声の人語が聞こえた。

エスピナスだ。

濃緑色の体躯に、ひときわ目立つ赤い角。二足歩行し、両腕が巨大な翼と一体化している飛龍、ワイバーンの一種だ。

知能の高い龍とはいえ、むろん本来ならば人語をしゃべるはずがない。

この不思議な龍につられて旅を始めたというのに、旅立って一カ月もしない間にもう一匹しゃべるモンスターと出くわすとは……。

「ギルドじゃこんな事一切教えちゃくれなかったぞ……くそ」

『何をぶつくさ言っている？』

チャチャブーとバルトの間までゆっくりと歩いてきたエスピナスが、こちらを振り返り呆れたような声を出している。

どうやら最初の言葉はチャチャブーに向かって言っていたようだ。

チャチャブーもバルトの事は眼中にないようだ。エスピナスを見つけてはしゃぐように跳びはねはじめた。

「おお、エスピナス！久しぶり。今度はどこまで行ってきたノ？」
どうやら知り合いのようだ。チャチャブーは気軽にエスピナスの背中に乗ると、踊り始めた。

チャチャブーのほうの言葉はエスピナスほど流ちょうではなく、言葉の頭と終わりが妙に抑揚が上がるので若干聞き取りづらい。

『ああ、南の樹海の方へな。そこで、このバルトが旅に同行する事になった』

チャチャブーを乗せたまま、バルトを顎で指し示すエスピナス。こちらは腹に響くほど野太く、よく響く美声だ。

「バルト？エスピナスについてきてたんだ？」

エスピナスの背中から飛び降り、チャチャブーはバルトの目の前で首をかしげた。

バルトの半分ほどの身長しかなく、花の生えた大きな頭をちょこんとかしげる姿はどことなく可愛い。

「あ、ああ……」

しどろもどろに答えたバルトは、無意識の動作で失った左手を後ろに隠していた。

それは、敵モンスターに弱点を教えたくない、というより

友人に都合の悪いものを見られたくないという気持ちからきている行為に似ていた。

「それで、お前に会わせてみたくな。運よく会えて良かった」

モンスター二頭の人語での会話。まったく理解を超えた光景にバルトが呆然とする中、

話は勝手に進んでいっていた。

『バルト、このチャチャブーは各地で奇面族の秘宝を探している凄腕のトレジャーハンターだな』

ようやく我に返り、バルトが話に加わろうとしたところで、タイミングよくエスピナスがバルトへ話をふった。

「あ……ああ。奇面族の秘宝だな。でもあれにそこまで価値はねえだろ？」

「マ……人間にとってはネ」

チャチャブーはそう言つと、先頭に立って歩き出した。

「この死の森の奥に遺跡があつてネ。そこに一つある事が分かつたんだ」

化石化した大木と、コケいっぱい地面。

白と緑に支配された不思議な空間を、ハンターと飛龍、奇面族の奇妙な3人パーティーは奥へと進んでいった。

その2

「な、なあ……一つ聞いてもいいか？」

『どちらにだ』

はじめに口を開いたのは、バルトだった。

急に足を速めて先頭に立ち、後ろを振り返って質問を發した。

「何で、お前達人間の言葉をしゃべってんだ？」

「ナがく、生きてるからネ。ボクの方が年下だから、まだ上手くはしゃべれないけれど」

エスピナスは上手にしゃべるよネ」

チャチャブーがカタコトで返す。

『おそらく、チャチャブーでもバルトの十数倍長く生きているぞ』

「……!?!?」

話せるようになるわけだ……。さすがのバルトも問答無用で納得せざるを得なかった。

そんな事を話しているうちに、チャチャブーが目指していたらしい遺跡が一行の目の前に現れてきた。

石化の森の最奥、白い崖を背に

白い巨木を何本も柱に使った西洋の神殿のような高く細長い塔だった。

石化の樹には何故かコケが生えないらしく、あいかわらず地面だけが緑色に染まり

高級な碧の絨毯が敷かれた宮殿のような、美しいたたずまい。

樹はひび割れ全体が歪んでもいたが、それもまた幻想的な雰囲気を一層掻きたてる風景であった。

頂上はちょうど崖と同じ高さのようだ。崖の上に登るための建物だったのだろうか。

『おう・・・美しいな』

「こいつは・・・すげえな。この遺跡そのものが秘宝じゃないか・・・」

「才お・・・僕は二度目だけれド。スゴいよネ」

三人はしばし立ち止まって、見惚れていた。

『・・・しかしこれでは、私は入れんな』

「ああ・・・そうだな。結構高い塔だから時間かかるかもなあ。

ま、この景色なら退屈はしねえだろ」

『まったくだ。堪能させてもらおう』

「がんばってくるヨ、エスピナス」

エスピナスにいったん別れを告げ、バルトとチャチャブーが遺跡の中に足を踏み入れると

中は意外にひんやりした空気が流れていた。

内部には何もなく、石化樹の柱が何本も立っているだけだった。

広さはそれほどないようだ。本当に崖を登るためだけの建物だったのだろう。
床も石化樹が使われているらしく、全面真っ白で内部は内部で美しい。
こつんこつんと乾いた自分の足音が響き渡り、なんだか心地いい。

「ネ、バルトはどうしてエスピナスについて旅してるノ？」

上へ登る階段に足をかけながら、脚の短いチャチャブーは跳びはねるようとしているのか身体をそらせるようにして聞いてきた。

バルトは再び無い左手を隠すと、頬をかきながらはぐらかすように返した。

「んー・・・まあ大したわけはねえよ。気にすんな。

それよか・・・」

「奇面族の秘宝って、人間には価値がないって言ったよな。チャチャブー達にとってはどんな意味があんだ？」

妙な飛び方で階段を上るチャチャブーを見下ろしながら聞くバルトの目は、久しぶりに好奇心に輝いていた。

「んー・・・見つけたら話してあげようかな」

「ち、もったいぶるなよ、チャチャブー」

毒づきながらも依然楽しそうに表情を崩したままのバルト。
階段を踏む足音も心なしか軽快さを増している。

「ああ、ところで今さらだけどチャチャブーって呼びにくいな。

俺に対しておい人間、って呼んでるみたいで具合が悪い。どう呼べばいい？」

いつの間にか階段はらせん状になり、頂上までの長い道のりがチャ

チャブーの妙な登り方のせいでさらに長く感じ始めていた。

が、バルトは相変わらず機嫌よくチャチャブーの少し先をのんびり登り、ときおり振り返っては話しかけていた。

「ン？ボクはチャチャブーなんでしょ？」

「違うちがう、名前だよ名前」

するとチャチャブーはいったん立ち止まると、小さな首をかしげ

「ナ前つてももの自体、人間だけが使ってるものなんじゃないかな。

ヨク分らないけど、一期一会って言葉あるんでしょ？」

ナ前なんて知らなくても、ボクとキミで良いつてというのがチャチャブーなんだと思うヨ」

存外、深い言葉が返ってきて

バルトも足を止めあごに手を当てた。

「・・・そうだな。名前つてももの自体人間くらいしか使わないのかも知れねえ、か。

俺とお前・・・ふうん」

なんとなく納得しながら、再び階段をのぼりはじめた。

「トころデ。なんでボクが秘室の場所分かっていながら森の手前まで戻ってきたかというトネ」

頂上までもう少し、というところで今度はチャチャブーが話し始めた。

「ああ、そうだったな。確認してから戻ってきていたのか。何か失敗でもしたのか？」

「イチばん上にネ。ソ龍がいたんだ」

「祖龍！？ミラボレアスか!？」

驚きのあまり階段から足を踏み外しそうになりながら、バルト。

祖龍ミラボレアス。全ての龍族の原種であるといわれる巨大な龍。ハンターズギルドでも最上級のハンターにしか情報を流さず、一般人とかけだしハンターには目にも触れないように厳重に警戒している強力なモンスターである。

もちろん、片腕を失ったバルトに勝ち目があるはずもない。

「先に言えよ、お前・・・」

「マ、大丈夫でしょ。サつき飛んでいくのを見たから戻ってきたんだ」

気楽にチャチャブーが言うが、バルトには不安が残った。

「すぐに秘宝が見つかるといいがな・・・」

その3

塔の頂上まで上がると、祖龍はいないらしく、意外に広い円形の広場だった。

広場の正面には崖の頂上もあつた。どうやら直接つながっているわけではなく、小さな橋がかかっており

そこから行き来するようになっていたようだ。

外観とは違い、橋も床もひび割れ、広場の端は崩れ、ところどころにガラクタが堆積してはいたが。

「上に出ちまつたぜ。どこに秘宝があるんだ？」

「アそこだよ」

チャチャブーが指差したのは、広場の片隅に積み上げられたガラクタの山だった。

「……そろそろ教えるよ。秘宝って、何だ？」

ガラクタの山を少しずつ崩しながら、バルトは再びチャチャブーに問いかけた。

「こん回の秘宝は、ボクのお嫁さんのなんだ……」

「？……どーゆーことだ？」

理解できず、作業を中断して立ち上がりながらバルト。

チャチャブーは小さな身体をガラクタの間にねじこむように押しこみ、奥の物をぽいぽい掻きだしている。

「ボクのお嫁さん、去年ボクが旅してる間に死んじゃったんだ」

「……!？」

チャチャブーの悲しみより、危険を感じとってバルトは周囲を見回した。

ここで死んだということは、祖龍の餌にでもなったということ。確かに良く見ると、ガラクタの中にはモンスターの骨などが混じっているようだ。

「じゃあ、秘宝つてのは・・・形見か、嫁さんの」

いまだ祖龍の気配がないことを確認してから、慎重にバルトは口を開いた。

「イヤ、お嫁さんそのものだヨ」

「？」

「チャチャブーの最後つて、どんなか知ってるよネ？」

疑問符を浮かべて立ちつくすバルトに、チャチャブーはガラクタに身体を突っ込んだままの姿勢で質問を返してきた。

「・・・ああ、なんか地面を掘って自分の身体を埋めるんだよね。なんなんだ、あれ？」

事実、斬りつけられて返り討ちにあつたチャチャブーは、何故か最後の力を振り絞って地面を引つ掻き

頭まですっぽり隠れられるほどの穴を掘って埋まるのだ。

「チャチャブーは、死ぬと地面に身体を埋めて秘宝を遺すんだ。デ、その秘宝つてのハ」

「タネなんだ」

「種？」

さきほどから疑問符ばかり浮かべている。バルトは完全に混乱して秘宝探しを放棄していた。

「ヒ宝を、その親しい者がどこかに植えると十何年か後にチャチャブーが生えてくるんだ」

「・・・！なるほど、それで前秘宝ハンターに・・・」

「ボクだけじゃない。チャチャブーは皆秘宝ハンターだよ。」

ボクが死んでも誰かがまた植えてくれる。

そう思うと祖龍も怖くないんだけどネ。才嫁さんの秘宝だけはどうしても失敗したくなくて」

しゃべりながらもバルトのほうは見向きもせず、チャチャブーは一心にガラクタの山を掘り進んでいた。

「そつか・・・そりゃー価値なんかはかれない宝だな」

やや遅れながらも、バルトは気を取り直してガラクタに再び挑み始めた。

「なあ」

「ン？」

「その秘宝を植えるのって、奇面族じゃなくても良いのか？」

「うん、大丈夫だよ。」

ボクが死んだらバルトにお願いしていいかな？」

「任せとけ」

カチャ。不意に、ガラクタの奥に妙な温かみを感じて、バルトは石の間に突っ込んだ右手を引き抜いた。

手を開いてみると、出てきたのは以前にも見た事のある、奇面族の秘宝だった。

「これか？」

振り向いて問いかけると、チャチャブーはそれには答えず、空の一点を睨んで立ちつくしていた。

「……バルト、急に雲が出てきたヨ」

「……!?!?しまった!」

チャチャブーに倣って上を見上げると、稲光を時折覗かせる雷雲が急速に迫ってきていた。

「祖龍……帰ってきやがった!」

その4

ヒヨオオオオ・・・

風切り音を響かせて、雲の下を巨大な龍がこちらへ迫ってくるのが見えた。

雷雲を呼び寄せ、雷撃と共に現れる伝説の祖龍、ミラボレアス。

全身に伸びる白銀の体毛をなびかせ、長い首と尻尾をゆっくりと上下させながら、しかし恐ろしいスピードで向かってきている。

二本の角、大きな翼、するどい牙と爪。全ての龍の祖であると言われるにふさわしい姿だ。

「まずい、一気に襲いかかってくるつもりだ！」

直線的に飛んでくる祖龍を避けようと、バルトは慌てて秘宝を懐に入れ、ガラクタの山から離れた。

ガシヤア！

その30メートルを超える、巨大すぎる体躯ゆえ、距離感がつかみにくいミラボレアス。

まだ遠くだと思っていたが、避けてみるとタイミングはぎりぎりだった。

バルトのすぐ後ろを、ガラクタの山を破壊しながら祖龍の尻尾が通過していった。

「く・・・っ！おい、大丈夫か!？」

即座に体勢を整えると、バルトはチャチャブーを探して首をめぐらせた。

「力すつたよ。痛い」

チャチャブーはばらばらになったガラクタに埋もれて、完全にひっくりかえつたままの姿勢で返事を返してきた。

「見たか？さつきミラボレアスがガラクタに突っ込んだ時・・・」

「イヤ？ナにかあつタ？」

チャチャブーが身軽にくるりと身体を起こしたのでとりあえずほつと一息つくくと、バルトは塔の橋から身を乗り出して下に降りて行ったミラボレアスを睨んだ。

「ガラクタの山の中から、なんか丸いモノかつさらって行ったぜ」
上からのぞくと、ミラボレアスの足元にまだその丸いモノがあるのがかすかに確認できる。

「まさか、たまゴ？」

「多分な。まずいぞ俺達完全に卵泥棒扱いだ」

人間が祖龍に卵泥棒扱いされるといふ事はどういふことか。

「餌」から「敵」へと対象が移るといふこと。

自分の体力など一切考慮することなく、苛烈な攻撃を繰り返し続けるのが目に見えていた。

ゴッシャア！

「ぐっ！やっぱりな！」

突然、塔全体が揺れた。ミラボレアスが長い尾を塔の基部に叩きつけたのだ。

もともと歪んでいた塔ははやくもバランスを失い、全体がきしみ始めた。

「あんなところで暴れてたら、エスピナスは大丈夫なのか!？」

下を見るのが困難なほど塔がきしみ揺れる中、バルトはもう一頭の龍を目で探していた。

塔基部からの煙で見えにくいのが、かすかにエスピナスの緑色のブレスが見えた気がする。

「つつつてもこつちのほうがヤバいな！階段は使えそうか!？」

よたよたと、揺れる塔の上を歩いて階段へ向かって行ったチャチャブーは

こちらを振り向くと、首を横に振った。

「ダメだね。もう螺旋階段が崩れちゃってル」

バルトはすぐに反対方向を向くと、塔と隣り合った崖の方へ駆け寄った。

そこには、塔と崖を結ぶ橋があったはずだ。

「こつちも・・・ヤバそうだけどな！」

橋は今にも真つ二つに折れて落ちそうなほどきしんでいた。

「ええい！これでもここにとどまるよりはマシだ！行くぜチャチャブー！」

意を決して橋に飛び込もうとしたその時だった。

グオオオオオオオ!!!

塔の下の方から、咆哮と共にミラボレアスが急発進で飛び上がった。

祖龍は巨大な身体を塔にこすりつけながら舞い上がり、バルト達の前を飛び去って行った。

「野郎・・・!したたかだぜ」

咆哮が聞こえるや否や、バルトは飛び立つ祖龍など見向きもせず、聞こえてきた方向とは逆、上の方を睨んでいた。

祖龍と共に塔までやってきた雷雲が、祖龍に置いて行かれただをこねるように急速にうごめき始めていた。

「自分の身を一切危険にさらさず俺達を始末する気だ!」

「ヤバい!伏せるチャチャブー!」

これまでに連呼した中でも最上級の「ヤバい」を叫ぶと、バルトは身をかがめるとチャチャブーの頭をひつつかみ地面へ引き倒した。

ピシヤア!

次の瞬間、雷雲から幾筋もの雷撃が塔をくまなく襲った。

「アああああああア!!!??」

甲高いチャチャブーの悲鳴を耳元でまともに受け、バルトは悶絶していたが。

「……!!?」

さらに恐ろしい現実が目の前で展開されていた。

「おい！叫んでる場合か！」

バルトが泣き叫んでいるチャチャブーを引きずり起こす。

「……ア！」

橋が、最後の雷の直撃を受けていた。

ゆっくりと、それこそ走馬灯のような緩慢さで、橋は奈落の底へ落ちて行った。

「ウン……」

祖龍が去り、落雷を避けられた幸運にもまさる絶望感が2人を押しさえつける。

基部が本格的に崩れ始めたのか、だんだん塔が低くなっていつている気がする。

揺れはまだ小さく、なんとか歩く事はできるが、階段は崩れ橋は落ち崩れていく塔の最上階で身動きができない状況だ。

「はあ・・・ま、最後に見たのが祖龍ミラボレアスだったってだけで・・・良いか」
とはいえもともと死ぬつもりで出た旅。特に不都合は無かった。
バルトは既に諦めていた。

その5

「・・・いや、待つてバルト。コの距離なら崖に飛び移れるヨ」
チャチャブーが、何やら小さな樽を取りだしながらよたよたと崖側へ歩いて行った。

「いや、無理だろ・・・。あれだけ離れてるんだぞ」
奇跡的にバランスを保ちながら少しずつ崩れていつているようで、塔の上部は揺れに揺れながらも
すぐに落ちはしないようだった。揺れのおかげで多少崖に近づくと
イミングもあるようだが、跳んで届くような距離とは思えない。

「いや、この爆弾を使えばなんとか届くと思う」
チャチャブーが取り出したタルには導火線がついていた。
どうやら手投げ式のタル爆弾のようだ。

「バルトが跳んだら、左手の盾目掛けてボクが爆弾を投げつけるヨ。
ソの爆風で届くと思うんだ」
「お前は どうするんだ。爆弾は1個だけか？」
心配になってバルトが問いかけると、チャチャブーはもう一つ、タルを取り出した。

「ちよつと痛いけど僕もこれで飛ぶヨ。ボクは軽いから楽でシヨ」
危険ではあるが、どの道崩れていく塔の上では考えている時間はない。

バルトは覚悟を決めると、懐に入れておいた奇面族の秘宝を取りだして、チャチャブーに差し出した。

「これ、渡しておくぜ。お前の嫁さんのだろ」
が、チャチャブーは何故か首を振ると

「バルトが持ってたヨ。サきに跳ぶ方が持ってるのがいいでシヨ」
はやくも一つめの爆弾に点火すると、バルトに向かって合図した。
「サあ、行くよバルト。トンデ！」

「ま、考えてる暇はないな。行くぜ！」

崖に向かって全力でジャンプするバルト。

とはいえ、大した距離跳べたわけではない。空中で即座に方向転換すると、盾を構えた。

同時にチャチャブーのタル爆弾が投げつけられ

ドオン！

虚空へと投げられたバルトの身体は爆風でさらに加速した。

ガッ！

ぎりぎりで高さが足りず、崖に背中から叩きつけられるが
バルトはすぐに崖のへりに手をかけると、平行な地面へ身体を持ち
上げた。

「急げ！これ以上塔が沈んだら届かねえぞ！」

しかし、チャチャブーは次のタル爆弾には点火しなかった。

「!?!?どうした」

一拍置いて、チャチャブーは塔の上から語りかけてきた。

「バルト、秘宝はまだ持つてるネ?」

「ああ、安心しろ。俺がしっかり持つてるから早くお前も跳べ!」

「・・・ボクは無理だよ」

チャチャブーは点火しないままのタル爆弾を持ったまま、しかし跳ぼうとしなかった。

「何言つてんだ!俺も届いたんだから俺より軽い奴が届かないはずはねえだろ!

多少ジャンプ力が足りなくても、その爆弾があればいけるって!」

「・・・バク弾つて、これ?」

チャチャブーは手に持った2つ目のタルを掲げた。

「ああ、早く点火してこつちへ」

しかしチャチャブーはなおも点火せず、タルを地面に置くと首を振った。

「これはね・・・睡眠爆弾なんだ。バク風は発生しないヨ」

「!?!?お前、なんで!」

話している間に、塔の崩壊は急に加速しはじめた。

どんどん低くなつていく塔の上で、チャチャブーは穏やかにバルトに語りかけ続けた。

「サつき話したよネ。ボクの秘宝はバルトにお願いするっテ」

「馬鹿野郎！そんなの真に受ける奴があるか！しかもお前嫁さんの秘宝はどうするつもりだ！」

穏やかに話すチャチャブーとは対照的に、声を限りに怒鳴るバルト。もう崖側からは膝をついて身を乗り出さないと見えないほどに、チャチャブーの乗る塔は沈んでいつていた。

「ダイ丈夫、バルトがボクの秘宝と一緒に植えてくれれば、ボクが生まれ変わった後自分でお嫁さんのを植えるヨ」

自分の死の瀬戸際になって、なんとも悠長な話をするチャチャブー。奇面族チャチャブーは、死ぬ時に遺す秘宝をその親しい者が地面に植えれば

十数年後に生まれ変わりとして生えてくるのだ。

「だからって、お前……！それ覚悟で俺を先に跳ばしたのか！」
声を枯らし、ほとんど涙声になりながら

崖から身を乗り出し手を伸ばし、叫ぶバルト。しかしその手が届くはずは無く、

「馬鹿野郎！俺は死にたかつたんだぞ！そんな奴の命助けてんじゃねえぞ！」

ただバルトは泣き叫ぶしかなかった。

バルトの怒声に、少し驚いたように顔をあげるチャチャブー。

「……ソの腕のことだネ」

「ああ！こんなんじゃ生きててもやる事ねえよ！」

既に枯れ果てた声で、崖の上から手を差し出したまま叫ぶバルトに
対し

チャチャブーはあくまでも穏やかに語りかけてきた。

「それでも、生きるしかないんだヨ。生きられるんだカラ」

「チャチャブーがそうサ。どんなに辛く悲しい事があっても、秘宝は残ル。」

ツらいから死んでリセット、なんてボクのトモダチは許さないはずだヨ。・・・ソしてボクは生まれ変わる」

「・・・！」

一瞬、バルトはチャチャブーの言葉に心奪われたが

「・・・そろそろ限界のようだネ。バルト、秘宝は頼んだヨ・・・」
塔の崩落はもはや最後の段階に来ていた。

今まで塔の頂上が平行を保っていたのが不思議なくらい、塔の基部は崩れていた。

急に加速していく塔の沈下。

「待て！まだだろチャチャブー！話は終わっちゃ・・・！」
崩落の轟音にかき消され、バルトの叫びは自分の耳にすら届かなかったが。

塔が崩れ落ちる最後の瞬間、聞こえるはずのないチャチャブーの声が、バルトの耳にかすかに聞こえた

「また、いつか・・・会えるヨ・・・」

その5(後書き)

ミラボレアスとの戦闘シーンを期待してページをめくっていただいた方、ごめんなさい・・・m(´)´m(´)

その6

『バルト！無事だったか』

崖をつたって塔の崩落場へ降りる途中、エスピナスが羽ばたいて迎えに来た。

「ああ・・・エスピナス。チャチャブーが、塔の中に・・・」

『やはりか・・・。乗れ』

エスピナスと共に崖から降りると

塔が建っていた場所は、がれきの山かと思いきや

建材が全て化石樹であったことが幸いしてか、ほとんど粉じんになっ
っていた。

バルトには感覚で分かっていた。

何の迷いもなく粉じんの中の一点に向かって歩いていき、チャチャブーの秘宝を取り上げた。

『それが、チャチャブーの秘宝か』

「ああ・・・」

奇妙な温かみのあるその種を手に、バルトはしばし立ちつくした。

「また会おう、だってさ。チャチャブーの奴・・・」

『そうか・・・、奇面族の秘宝について聞いたか』

「気楽な、もんだな」

『そうとも言えるな。しかし、お前はまた会ってやらねばならんのではないか？』

「・・・」

『また会おうと言われたのだろうか？』

十数年後まで、この身体で生きていられるか・・・？

・・・生きて、いたいのか？

十数年後の生まれ変わりを信じてたやすく人に命を譲ったチャチャブーと

身体の一部を失っただけで、その十数年の生に疑問を持つバルト。
バルトは、チャチャブーと自分の生死の違いに戸惑いつつ

二つの秘宝を丁寧丁寧に、陽のあたる地面に植えた。

その6（後書き）

最後のハンター、第二章これにて完結です。
さて、このお話の今後ですが。

メインストーリーは完結しているのですが
ここから先に挟むサブストーリーが執筆途中のため、
しばらくの間（4/18）最後のハンターは更新が途絶えます。

未投稿作品がまだありますので、気に入っていたただけの方はそちら
の更新をチェックしていただければ幸いです。

その1

「う……後ろ！危ないっ！」

数瞬。状況の把握に時間がかかった。

何の危険もないのに突然横から叫び声が聞こえたのだ。

尾槌竜の重厚な鎧を身につけながらも、兜は被らず視界を確保して警戒しながら海岸沿いの涼しげな林を歩いていた。

ハンターという職業柄、バルトは常にまわりに気を配っている。

周りには危険な気配は一切ない。声の主の気配にも気がついていたが、しかし危ないと言われても……。

「……あ。」

ふと、思い当たるふしにぶち当たり、バルトは立ち止まった。

『……む。』

後ろから似たような声が聞こえてきた。

バルトの旅の連れ、棘竜のエスピナスだ。

(エスピナスを見て声をあげたのか・・・！)

今さらであるが飛竜と共に旅をする異常さに気付き、バルトは失った左腕に括りつけた盾を振りかぶった。

「うおおおっ！」

真後ろへ向けて振り向きざまに叩きつけた。

グオオオオ！！

後ろのエスピナスも、辛うじて盾をかわしはしたが、バルトに同調してわざと大げさにのけぞった。

(変に思われなかったか・・・！？)
へ々な芝居に赤面しながらバルトがようやく声の聞こえてきた場所を見やると、声の主は少年だった。

「は、早く離れな！」

敵対を装って構えるバルトとエスピナスに向けて少年は間の悪い事に何故か駆け寄ってきた。

10歳を少し越えたくらいだろうか。ある程度は伸びた手足を、しかしばらばらに動かしてどたどたとこちらに向かってくる。

簡単な革鎧と、長めの赤毛がはみ出た革帽子。そして手には少年の身体には不釣り合いな長い棒。

少年はつんのめるようにしてぎこちない手足をばたつかせると、手にした棒をエスピナスめがけて投げた。

「ちい・・・っ！」

近くを通り過ぎ、エスピナスへ向かう棒を、反射的にバルトはつかんだ。

そのまま片手で頭上一回転させると、改めてエスピナスへ穂先を向けて構える。

「ひ、飛竜か！覚悟しやがれ！」

そしてこちらもぎこちなく、エスピナスとさも戦おうとしているかのようにバルト。

覇竜との戦闘で失った左手には片手剣が納めてある小型の盾がくくりつけてあるので、右手の棒はとりあえず槍のように小脇に抱え、構えた。

(・・・む、本当に槍だな、これは。)

バルトは、つかんだ棒が奇妙な形をしている事に気がついた。

単なるまっすぐな棒かと遠目には見えたが、柄全体には細かい彫刻がびっしりと施され、

しかもその彫刻が美しさだけでなく全体の微妙な凹凸により

手に吸いつくような滑りどめの効果がある事がつかんでいるだけで分かる。

先端には丸い刃が2枚、敵に向けて×の字を突きつけるような形に取り付けてあった。

棒ではない。機能的には明らかに槍だが、見てくれは杖のようなそんな奇妙な形の武器であった。

「余計な・・・事をつ！」

ともかくも、エスピナスと戦うわけにはいかず少年を戦いに巻き込むわけにもいかない。

バルトは肩越しに少年を確認すると、エスピナスと少年の間に入った。

槍を投げたままの姿勢でいる少年をよく見ると、小刻みに震えていた。

(チツ・・・足がすくんでやがる)

このまま少年が動かなければ、エスピナスと対峙しているだけで何もすることはできない。

バルトは小さく舌打ちすると、すうっと息を吸い込み

「邪魔すんなガキが！お前こそさっさと逃げろ！」

「わっ・・・わあああああああ！！！！？」

バルトが怒鳴ると、ようやく我に返ったのか少年はビクンと全身を震わせ、次の瞬間脱兎のごとく逃げ出した。

・・・ふう。

お互い構えだけはとらずに、少年が駆けていく後ろ姿を眺めるエスピナスとバルト。

「・・・ま、芝居なんかしなくても、お前とまた戦えるんならそれも良かったんだけどな」

不敵な笑みを浮かべながら、槍をエスピナスに向けてバルト。

『フフン、そうだな。死にたいなどと言っていたあの頃が嘘のように元気になったじゃないか』

エスピナスも芝居つけたつぷりに足で地面を搔いている。

しかし、すぐに真顔に戻ると構えを解いてバルトに近づいてきた。

『まだ・・・死にたいのか？』

同時に構えを解いたバルトは、軽薄に肩をすくめると特に考えることなく答を返してきた。

「どっちでもいいな。生きる目標っていうほどの情熱はないが、こ

の旅も楽しくなってきた。

左腕が無くなったつつつても、こつやつて盾をくくりつけて戦う片手剣やランス、ガンランスなら扱えるしな。……つと」

ふと、自分の手の中に残った奇妙な槍を思い出し、バルトは少年が駆けて行った方向を見つめた。

「しまったな。あのガキにこの槍返さなきゃな」

『そうだな。結局あの少年は何だったのだろうか』

まあ、久しぶりの人里だろう。私を狩った事にして行って来い』

あっさりと自分の敗北を宣言すると、エスピナスはさっさと翼をはためかせて飛び上がった。

「……子供は苦手なんだがな……」

バルトは深く嘆息すると、少年の村を探しに脚を踏み出した。

その2

「こっちか・・・ん？」

海辺の林を、少年が逃げて行つた方向へ歩いて行くと
そう何分も行かないうちに、前方から闘争の気配が感じられた。

「ちっ・・・あのガキ、またか・・・！」

拾つた槍は背負っている。

左手の盾から本来の武器である片手剣を抜くと
バルトはマングローブ林の邪魔な枝根を器用に避けながら疾走を始めた。

「く・・・っ！来るなら、来い！
今度は逃げやしないぞ」

林を抜けると、少年がモンスターと対峙しているのが見えた。
震えながらも両足をしっかりと踏ん張り
槍の代わりであろう長めの木の棒を握りしめていた。

クエクエクエ・・・

少年の目の前には、ランポスが突っ立っていた。
青い鱗が特徴的な、小型の鳥竜種である。

鳥とは行っても翼は無く腕も短い。両足の巨大な爪で飛びかかり蹴倒す、攻撃的なモンスターだ。

だが、目の前にいるランポスは子供なのだろうか、頭の先から尻尾の先まで1メートルちょっと、という程度。
のしかかられてもすぐに弾き飛ばせそうだ。

クエ?クエクエ・・・

しかもどうやら子ランポスには襲う気もないようだ。

バルトがひとまず飛びだすのをやめ、様子見をしているうちに青鱗のモンスター、ランポスは革鎧の少年をも珍しそうに、まわりを回りながら品定めしはじめた。

「・・・っ!」

赤毛の少年はランポスの一挙手一投足にいちいち過剰反応しながら、しかしワンテンポ遅れて向き直っている。

気合の入ったいでだちとは裏腹に、あまりにもお粗末だ。

まずいな。バルトが危険を感じ、のそりと出て行こうとしたその時、

「おあっっ!」

赤毛の少年が、意外に確かな身体さばきで踏み込み、棒を突き出した。

ランポスが首を横にそむけ、片目だけで相手の全体を見定めようとした瞬間だった。

敵の死角へと大きく一步踏み込むと、さらに死角となるランポスのクチバシのアゴ部分を狙う下からの突きだ。

ゲエエツ！

当然、油断していたランポスに避けれるはずもなく大きく後ろへのけぞった。

「ほう！」

バルトが一声うなるほどの一撃。

棒を持った少年も手ごたえを感じたのだろうか、蒼くなっていた顔に血の気が戻り

遠目にも落ちついて見えるようになった。

バルトも抜いていた片手剣を鞘（盾と一体化している）に収めた。

が、しかし。

クアッ！

「わあっ!?!」

ようやく少年を敵と認識した子ランポスの、混乱が収まらぬままの単純な体当たり。
しかし赤毛の少年にとっては予想だにしない攻撃だったようだ。
完全に避けるタイミングが遅れ、長い尻尾でしたたかに背中を叩かれた。

「この・・・っ！」

グエツ！

ケエエツ！

「痛っ！」

自分の攻撃の時だけ妙に鋭い踏み込み、身体の動きを見せる少年だが何故かランポスの攻撃を避けることはまったくできていない。間合いも読めず、攻撃パターンも把握できていないようだ。子供とはいえ、ランポスと人間では体力に違いがありすぎる。互いに攻撃を避けられないドッグファイトを続けていれば、どちらが先に倒れるかは誰の目にも明らかだ。

「う・・・っ！」

ついに棒を飛ばされ、少年は地面に尻餅をついた。
ランポスは油断なく一旦距離を取ると

少年に次の一手がない事を確認してから大きくジャンプし、一直線に少年目掛けて飛びかかった。

「くそ・・・っ!!」

少年は頭だけは守ろうと左手で覆う。

気丈にも右手は地面の石を握り、
来るであろう衝撃・・・反撃の瞬間・・・そして恐らくは死・・・
に身を硬くしていたが。

「・・・？」

その瞬間はいつまでも来なかった。

疑問符を浮かべながら少年が皮帽子からそっと周りをつかがうと。

「反応の鈍さが致命的だな。敵と自分の状況くらい常に把握しておけ」

皮帽子のひさしからこっそりと覗いた大きな目がとらえたのはその胴体を貫いたまま、子ランポスを槍で持ち上げているハンターの姿だった。

「おら、さっさと立て。助けられてありがとぅくらい言えねえの

か

ランポスの死体を乱暴に放り投げると、バルトは地面に座りこんだままの少年に声をかけた。

海、林、南国の風。

ランポスが好む環境が全て整っているこの場所に、子ランポスがー頭だけで居るはずがない。

はやくここから立ち去る必要があった。

「・・・余計なことすんなよ」

しかし、うつむいたままの少年の口から聞こえてきたのは、バルトの予想とは違い

感謝の言葉ではなかった。

海岸沿いの林らしく、湿った風が吹く中

乾いた少年の声が喉から絞り出されるように響いた。

「イーオス・・・くらい・・・オレ一人で簡単に倒せたんだよっ！」

右手の石を精一杯の力で握りしめ、左手で一度強く地面を叩くと勢いよく立ちあがった。

背伸びまでしてバルトを威嚇するように顔を近づける少年に、多少気押されながら

「・・・イーオスは海辺には居ねえ。こいつはランポスだ」
今度は抑え気味の声で返した。

「・・・！？わ、分かってるよんな事あ！言葉のアヤって奴だよ！
自分の髪の毛と同じくらい顔を真っ赤にして、少年。

「・・・こんな所にまでモンスターが来たもんで、ちょっと驚いた
だけだ」

むくれつつらで言う少年の言葉を聞くと、バルトは槍を地面に突き立て、考え込むように腕を組んだ。

「・・・お前、名前なんてんだ」

「エルモジュニア。あんたは？ハンターみたいな格好してるけど」
うさんくさそうな顔をしながらも、一応少年、エルモジュニアは素直に名乗った。

バルトは聞き返された事には応えず、腕組みしたまま質問を続けた。

「お前、モンスター見るの今日が初めてだろ」

「・・・っ！」

「このあたりは見たところかなり豊かな土地のようだな。」

モンスターがそこかしこに縄張りを作っておかしくないはずなんだが」

本来どこにでも生息しているはずの、もっとも弱い肉食モンスターに対して初見というのはあまりにもおかしい。

「・・・父さんが睨みをきかせてたおかげで、このあたりはほとんどモンスターが棲んでなかったんだよ」

赤く紅潮していた顔を曇らせ、何故かうつつむきながらエルモジュニア。

しかしすぐさま顔を上げると、バルトの持つ槍を指さし再び詰め寄ってきた。

「それよりもその槍、返せよ。父さんのなんだぞ」

ランパスを貫いたまま立ち話をしていたおかげで、バルトの手まで

血がしたたり落ちてきていた。

ドサツ

バルトは黙ったまま、ランポスの死体を落とすと槍を少年には渡さずじっくり眺め始めた。

「なかなかの業物だな。盾はどうした」

「盾は無いよ！いいから返せよ！」

通常、ハンターが扱う槍は盾とセットだ。返せ返せと言いながら背負った槍を奪おうとするエルモジュニアを適当にさばくと、

「本来の持ち主に直接返す。村に案内しろ」

バルトは言い放ち、一人勝手な方向に歩き始めた。

「あ、勝手に決めんなよ返せよ！もうなんで村の方向知ってたんだよ
ッ」

少年も慌ててバルトの前に立ち、大股で村への案内を始めた。

その3

海辺のその村は、見た目こそ南国の陽気で開放的な作りではあったが、どこか沈んだような、活気のない沈んだ空気が漂っていた。なるほど、モンスターの侵入を考えていないらしい簡素な造りの木の杭で囲んだだけの無防備な外見で

しかし今は襲撃に恐れているかのように静まりかえって、家の外に人影は少なかった。

「あ、エルモジュニア！どこ行ってたんだよ村中探したんだぞ！」
村の入り口で、門番らしい若い男にとがめられた。

後ろを歩く見知らぬハンターには目もくれず、とりあえず少年のほうに怒鳴り声をあげる。

「村の外のモンスターを退治しに行ってたんだよ！もう少しでイー・ランポスを仕留めるってところを邪魔されたんだ」
後半言葉を濁しながら、エルモジュニアは後ろを歩くバルトを示した。

「ああ？モンスター退治だ？嘘つけ。どうせギルド派遣のハンターを見物しに行っただけだろうが」

門番の男はバルトのほうを無遠慮にじろじろ見ると、身をひるがえした。

「村長呼んでくるわ。ハンターの兄ちゃん門を見張っててくんねえか」

さらに身勝手な一言を残し、男は村の中心へ走って行った。

「・・・この村の人たちはヨソ者が嫌いなんだ」
走り去っていく男の背中を見つめながら、エルモジュニアはぽつりとつぶやいた。
革帽子のひさしのせいで、バルトの位置からはその表情をうかがうことはできなかったが、
その言葉はバルトに対する謝罪というよりも、村人への軽蔑の気持ちを感じられた。

「いやいや、失礼な事をしましたな。ハンター殿」
先ほどの門番を連れて、村長が門まで出てきた頃には、夕日が沈みそうな時間になっていた。
ゆうに2時間は門の外で待っていたバルトは、槍を気にしていたのか何故かそばを離れないエルモジュニアと一言も交わすことなくただ突っ立っていた。

「なんとなく状況は推察することができるが・・・」
村のまわりを観察しながら、バルトは口を開いた。

「誤解の無いように、先に言うておく。
俺はギルドが派遣したハンターじゃない。村を守る気は無いからな」

「なんと！」

大げさに驚く村長。

ちらりとエルモジユニアのほうを向くが、少年は首を横に振る。

「そもそも、この槍の持ち主がいるんだろ？このガキの父親と聞いたが」

「ん？槍の持ち主ですと？」

村長は妙に甲高い声だった。村の外で二時間も待たせた今でも、一向に村の中へ招き入れる様子は見せない。

良い印象をはじめから持てなかったこの老人だが、さらに無遠慮な事に

「この子の父親、エルモですな。彼なら先月モンスターに食い殺されましてな。

そのモンスターが近辺に巢食ってしまい、今まで村には近づかなかったモンスターも徘徊し始めてしまいました。

それでギルドに新しいハンターの派遣を要請しておったのです」
実の息子がいる前でもんでもない事を言い出した。

いくら事実であろうが、年端もいかない子供に聞かせる言葉ではない。エルモジユニアがビクン、と全身を震わせるのが見えた。

(・・・ち。ガキに気を遣うのは性に合わないんだがな)

バルトは心の中で毒づく

「まあ・・・条件次第じゃモンスターを狩ってやらないこともない困ってんだろ？詳しく話聞かせるよ」

後ろからエルモジユニアを小突いてどかすと、村長を促して勝手に村へと入って行った。

「しみつたれた村だぜ・・・」
予想通り、村長の出した条件はるくでもないものだった。
申し訳程度に出された簡素な食事を食い散らかし、バルトは真っ暗
になった中、村長の家を出た。

宿すら用意されなかった。

「村の木のそこかしこに昼寝用のハンモックがつるしてあるでしょ。
う。好きにお使いください」
なかなかオツなものですよ、と気を利かせた風を装った厄介払い。
バルトはどうにもこの村の雰囲気が好きになれなかった。

適当に村の中をぶらついていると、村はずれあたりで小さな焚火を
見つけた。

「おう、エルモ」

バルトは近づくと、膝を抱えて小さくなっている赤毛の少年の横に
座った。

エルモジュニアはちらりと横を見るが、すぐに炎に目を戻した。

「・・・オレはエルモジュニアだよ。エルモは父さんだ」

「俺はお前の父親なんか知らん。ジュニアなんて付けて呼ぶの面倒
だ」

「お前もそのうち父ちゃんを超えたらエルモって名乗るんだろ？」
ハツ、と。若きエルモがバルトのほうをはつきりと向いた。

しかし、またすぐに目を伏せ焚火のほうに向き直ると

「・・・その槍、盾も一緒に無いとおかしいの？」

バルトが背中につるしている、奇妙な杖状の槍を指した。

「ああ。ランスは盾とセットで使うのが本来のスタイルだ」

バルトは立ち上がると、背中から槍を外しエルモジュニアの前に突き立てた。

「返すぜ。父ちゃんの形見だったのか。盾は見つからなかったのか？」

エルモジュニアは無言で頷くと、槍を抱え込んで動かなくなった。

「・・・フン」

バルトは立ち上がると、砂浜に面した木につるされたハンモックを見つめそちらに向かった歩き出した。

「明日お前の父ちゃんを倒したっていうモンスターを狩る。

話を聞く限り、相手はラギアクルスの亜種だ。本来こんな場所にいるモンスターじゃあないが、恐らく海で戦うことになるだろう」
肩越しに語りかけてくるバルトの言葉を、エルモジュニアは焚火を見つめながらぼんやり聞いていた。

「・・・父さんはあの時、病気だったんだ。村の人には何故か何も言ってなかったし、黙っているように言われてただけだ」
ぼつりと、そんなことを言ってくる。

確かに。バルトは息子に叩き込んだであろうあの体術を思い出していた。

村の近隣にモンスターが近寄ってこなくなっていたことを考えても、相当の実力を持ったハンターだったのだろう。

「言い訳だな」

しかし、バルトはわざと冷たく言い放った。不意に浴びせられた言葉に、エルモジュニアから危険な気配が発せられたが

「ランスなんて盾の防御の陰でちくちく刺すしかできないようなハンターじゃたかがしてるな。」

明日、俺が格の違いってものを見せてやるぜ」

目的のハンモックに飛び乗ると、寝ころがった状態で大声で続けた。

「村長には明日、この砂浜で戦うと告げてある。」

海から上がってくる頃のラグiakルスじゃあ相当弱ってるだろうし砂浜中に罫を張り巡らせているから村は安心。砂浜を遠巻きに見物しておくといい、だが決して砂浜には入るなと言ってある」

あくびをしながら軽薄な声音で、しかし的確な情報を盛大な独り言でわめくバルト。

エルモジュニアもいつの間にか焚火から目を離し、身を乗り出して聞いている。

「ま、砂浜の罫ってのは邪魔されないための嘘なんだけどな。」

良いか、つまり明日のこの砂浜は

誰にも邪魔されないお前の父ちゃんの仇との決闘場なんだよ」

そこまで言ったところで寝返りを打つと、バルトは声のトーンを変えた。

「だから、邪魔するなよ。ガキ」

「……」

そのまま大げさにいびきをかき始めるバルト。

エルモジュニアは、赤毛を震わせ抱え込んだ槍をぐつと握りしめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9253r/>

最後のハンター

2011年11月24日00時55分発行